

## ガバナー補佐ロータリーを語る

### 「それでいいのだ」

国際ロータリー第2510地区 第10グループガバナー補佐

玉井 清治 (函館亀田RC)



以前、羽田空港出発ゲートの付近で「We serve」と称して素晴らしいボランティア活動を行っている奉仕団体のPR動画を目にして、ため息をついたことがあります。確かに市町村の境に「ようこそ〇〇町へ」の看板や、カーブした道路にある反射板、空港の到着ロビーなどでは他奉仕団体の看板をよく目にします。これが広報活動なのでしょう。それに比べロータリーは・・・。広報を積極的に活動していないように感じます。

RIもポリオ撲滅の一手前まで来ていますが、たいへん大きな素晴らしい奉仕活動なのに日本のメディアが全然取り上げません。これはいったい何故なのか。ロータリーはこれまで広報活動を軽く見てきたのではないかと時折思い、クラブもそれにもっと力を入れると会員増強に繋がるのではないかと感じる瞬間があります。

古い日本ロータリーの資料を読んでいたら、昭和13年比叡山で開催された第8回地区協議会の講演資料の中で、米山梅吉翁は「ロータリー 唯一の秘密」と題して次のように発表しておりました。

「もし、ロータリーに秘密があるとすれば、ロータリーは声を大にして自分のする事を世間にそんなに発表しない。即ち、右の手でする事を左の手に知らす必要はない、吾々は孝行して吹聴することは要らない、何となればそれは奉仕のためです。」

米山梅吉翁は生涯ほとんど自分の全財産を恵まれない人々のために投出し、しかもそれが自分からの施しであるということをしらせないようにして死ぬまで奉仕を続けられました。そのお陰で、たくさんの学生が大学に進学できたり、貧しい生活から救われたのです。

私たちロータリーはどちらかというと「陰徳」なのです。徳を決して表に出さないで一生懸命「善行」をやっていて自慢しないというのがロータリアンの控えめな素晴らしい姿だったのでしょう。しかし、時代の変化を理由にロータリーはこの陰徳を陽徳に変えようとする動きがあります。朗らかに「私たちはこのようなことをやっていますよ。」自慢じゃなくて「こういう効果がありました。」「こういう効果があります。」と発信すれば地域社会も理解し協力してくれる。上手なやり方で「陽徳」に変えていこう。つまり、公共イメージ向上も、いかにロータリー運動を地域社会に理解していただき、協力を得て会員増強に繋げていきたいという考えです。陰徳は素晴らしいことですが時代遅れなのでしょう。陰徳それだけでは会員は増えないような気がします。「ロータリーは穴の空いたバケツだ」とよく言われます。「入れても、どんどん会員は減ってしまう」という現実です。特に若い人達は結果が出ないと陰徳を伝えてもついでこないような気がします。

我々はそもそも世の中の人に認めてもらうためにロータリークラブに入会したわけではありません。「誰もがこの世の中を変えようとしてロータリークラブに入ったのではない。大部分の人間は、仲間が広がる機会を求めて入会したのです。」とエドワード・カドマンRI元会長(1985-86)が言うように、フェローシップを求めて入った会員は例会を通じて徐々に心を磨き、奉仕の感動を得ながら、少しずつ真のロータリアンになっていく。そして、この心を磨くことは、職業奉仕、すなわち徳のある経営につながっていくのではないのでしょうか。

どんな良いことでも、これ見よがしに鉦や太鼓を叩いて大騒ぎしているうちは「偽善」でしかないということだと思えます。人に見えないところで実践してこそ「光る」のです。そして、ロータリアンであることに誇りを感じます。

天才バカボンのパパが言うように「それでいいのだ。」